

<研究ノート>

## IFLA LRM 試論 (7) -LRM 5.8 「逐次刊行物のモデル化」

千葉孝一

### 第8章 LRM 5.8 「逐次刊行物のモデル化」

#### 第1節 編集コンセプトと計画

前章で指摘した通り、LRMは5.7「Modelling of Aggregates」（「集合体のモデル化」）と5.8「Modelling of Serials」（「逐次刊行物のモデル化」）をペアで論じている。コンテンツ重視のLRMにとって両者はいずれも扱いつらい対象だが、逐次刊行物のモデル化は「集合体」のそれよりもさらにハードルが高い。

逐次刊行物は「集合体」と違い、キャリアの在り方による分類なのだが、LRMはそれをコンテンツ側からアプローチする。

逐次刊行物は、例えば新聞がその典型であるように、基本的に毎号コンテンツが異なる。昨日と今日でコンテンツが同じであれば、そもそも「新聞ではない。その為、逐次刊行「物」が同じかどうかは通常、キャリア（容器）で判断される。コップに何が注がれているかは、コップが同じかどうかの判断には関係しない。新聞とは、毎朝届けられる同じ名前の紙束のことなのである。

だが、LRMは逐次刊行物のモデル化を通常通り、「著作」→「表現形」→「体现形」というフローで行う。説明の主役は「体现形」（キャリア）ではなく、あくまでも「著作」（コンテンツ）でなければならないのである。

LRMは「集合体」のモデル化において、収録作品とは別に、「集合体」独自のコンテンツが存在していると指摘する。例えば短編小説集の場合、そこに収められた複数の短編小説とは別に、それらを集めて配列する「編集コンセプト」が存在しており、それをモデル化したのが「集合化著作」と「集合化表現形」だ、というのである。LRMは「著作」と「表現形」の系列をふたつ使って、「集合体」をモデル化するわけである。

重要なのは、「集合体」を代表する「著作」は収録作品の「著作」ではなく、独自コンテンツをモデル化した「集合化著作」の方だということである。この点については第2節で取り上げる。

LRMは逐次刊行物のモデル化についても、同じ手法を使っている。逐次刊行物の各号は、それぞれ「集合体」の一種といえる。例えば雑誌の各号は「記事の集合体」であり、それらは記事（「著作」）と「編集コンセプト」（「集合化著作」）というふたつの「著作」系列でモデル化される。

LRMはそこに逐次刊行物全体に対応する逐次刊行「著作」を新たに導入し、都合3系列で逐次刊行物をモデル化する。そして、逐次刊行物を代表する「著作」は、（基本的に毎号異なる）各号における記事の「著作」や「集合化著作」ではなく、逐次刊行「著作」（逐次刊

行物全体の独自コンテンツ) なのである。

では、その逐次刊行「著作」は具体的にどのようなものなのか。その内実については、LRM よりも「IFLA 図書館参照モデル (IFLA LRM) レクチャー」(Pat Riva 著、小野塚由希子 訳、以下「レクチャー」と略記) の説明の方が分かりやすいので、そちらから引用する (一部原語を補った)。

逐次刊行著作全体は、各号がどのように構成され発行 (publish) されるかについての計画 (plan) である。これには、編集方針と範囲、出版物のスタイルと形式などが含まれ、その他の特徴では頻度や、順序付けの方式が含まれる場合がある。この広範な計画は、個々の号の具体的な計画を生み出す (gives rise to) フレームワークである。<sup>1</sup>

(引用1)

逐次刊行「著作」は逐次刊行物の「広範な計画」をモデル化したものというわけである。では、それは「集合化著作」と比べて、どこがあるいはどのように「広範」(broader) なのだろうか。

「集合化著作」と逐次刊行「著作」については、「著作」(LRM-E2) のスコープ・ノートで次のように説明されている (邦訳を一部改変し、原語を補った)。なお、前章では以下の言説を批判したが、その点については第4節以降に譲り、それまではLRMと「レクチャー」に沿って議論を進める。

集合化著作 (aggregating works) および逐次刊行著作 (serial works) の場合、著作の本質は、結果的に集合体現形 (aggregate manifestation) として具体化される、他の著作の表現形の選択、組立 (assembly)、配列 (ordering) に関するconcept or planである。<sup>2</sup> (引用2)

LRMはここで「集合化著作」と逐次刊行「著作」を一括して定義し、その際「編集コンセプト」(concept) と「計画」(plan) を区別していない。また、引用2は基本的に「集合化著作」に関する説明といえる。

本章では以後、「集合化著作」については主に「編集コンセプト」、逐次刊行「著作」については主に「計画」を用いて、両者を区別する (理由は後述する)。

LRMが指摘する逐次刊行「著作」の特質は、以下の4点にまとめることができる。

- A、逐次刊行「著作」(serial work) は逐次 (serial) ではなく、ひとつである
- B、逐次刊行「著作」は「集合化著作」との間に「is inspiration for」(LRM-R21) という「関連」をもつ
- C、逐次刊行「著作」と「集合化著作」の間に「全体・部分関連」はないが、逐次刊行「体

現形」と各号の「集合体現形」との間には「全体・部分関連」(LRM-R26)がある  
D、逐次刊行「著作」はただひとつの逐次刊行「表現形」と逐次刊行「体現形」をもつ

特質Aについて、LRMは以下のように指摘している。

ここでの用語「*serial work*」の使用法は、連続する集合**体現形**を指す「逐次刊行物 (serial)」という用語と互換的に使用される、図書館における一般的な使用法とは異なる。<sup>3</sup> (引用3)

回りくどい説明だが、要は逐次刊行「著作」＝「広範な計画」は逐次 (serial)「創造」されるわけではないということである。例えば、特定の新聞の逐次刊行「著作」は、毎朝「創造」されるわけではない。逐次刊行「著作」は個別の逐次刊行物それぞれにひとつだけであり、刊行がどれほど長く続いても増えることはない。

ただ、逐次刊行「著作」＝「計画」は途中で変化することがある点に注意が必要となる。しかし、その変化は新聞のコンテンツが昨日と今日で変化するのは様相が異なる。逐次刊行「著作」は (例えば人間と同じように) 同一のまま、変化することもある。この点については第3節で論述する。

特質Bは、逐次刊行「著作」と「集合化著作」の「関連」の違いである。LRMは先の引用2で、逐次刊行「著作」と「集合化著作」の本質を一括定義していたが、それらと他の「実体」との「関連」は同じではない。

「集合化著作」は「集合化表現形」を通じて、収録作品の「表現形」との間に「関連」「集めた」(LRM-R25i)をもつ。だが、逐次刊行「著作」は逐次刊行物各号の「著作」を「集める」わけではない。逐次刊行「著作」は各号の「集合化著作」との間に「is inspiration for」(LRM-R21)という「関連」をもつのである。

この「関連」は、邦訳では「創造的刺激となる」(LRM-R21)や「刺激を受ける」(LRM5.8)と訳されている。ここではそのままでも日本語として通じると考え、以後、「インスパイア」と表記する。

以上を踏まえ、ふたつの記事だけを掲載した雑誌のある号のモデル図を提示する。なお、LRMは逐次刊行物のモデル図を提示していないが、「レクチャー」は詳細な図を提示しており、以下の図1はそれを参照している。<sup>4</sup>

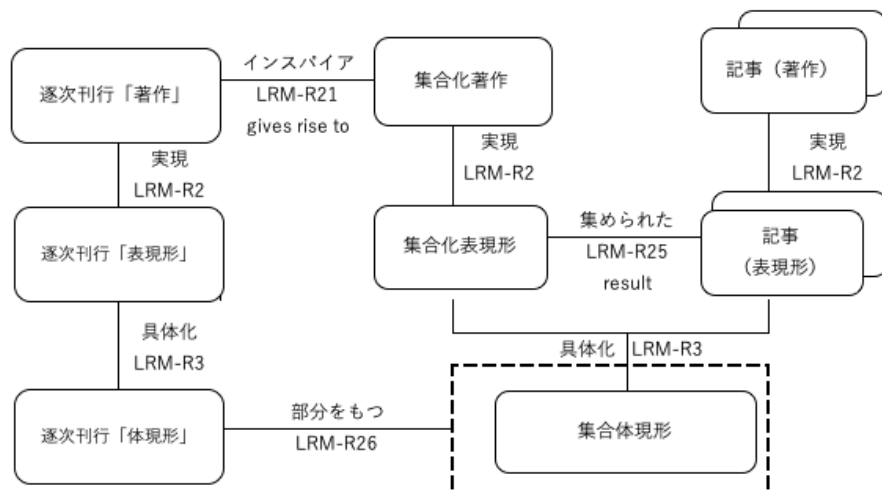


図1

逐次刊行「著作」はただひとつの逐次刊行「表現形」によって「実現」され、独立した系列になっている。収録記事の「著作」と「表現形」及び「集合化著作」と「集合化表現形」もまた、それぞれ独立した系列をなしている。そして、逐次刊行「著作」は別系列である「集合化著作」を「インスパイア」し、「集合化表現形」がやはり別系列の記事の「表現形」を「集める」わけである。

LRMは「インスパイア」について、ミュージカル「West Side Story」は戯曲「Romeo and Juliet」に「インスパイアされた」という具体例を挙げている。<sup>5</sup>一方、逐次刊行「著作」の「インスパイア」については、LRMは次のように説明している（邦訳を一部改変し、原語を補った）。

逐次刊行**著作**は、個々の号を形成 (resulting) する一連の集合化著作に、著作・創造的 刺激関連 (work-inspiration relationship LRM-R21) を通じて影響を与え、それを引き起こすものになる (gives rise to)。集合化著作は相互に異なっているが、それぞれ逐次刊行**著作**の全体的な編集方針 (editorial policy)、対象領域およびスタイルによってインスパイアされている。しかし、逐次刊行**著作**は各号との間に**著作**レベルの全体・部分関連を有してはいない。<sup>6</sup> (引用4)

逐次刊行「著作」は「集合化著作」より上位の「計画」であり、「編集方針」等を通じて、各号の「集合化著作」（個別の「編集コンセプト」）を「インスパイア」しているというわけである。

邦訳は「result」と「gives rise to」を共に「形成」と訳している。だが、「result」は「集合化表現形」の「関連」「集めた」、「gives rise to」は逐次刊行「著作」の「関連」「インスパイア」に合わせて、訳し分けるのが望ましい（図1参照）。

「集合化表現形」はコンテンツ（記事等）を「選択」して集め、さらに「組立、配列」することで、個別の各号を「形成」(result) している。この「形成」は「関連」「集めた」の適切な訳といえる。

一方、「gives rise to」については、LRMでは「形成」、「レクチャー」では「生み出す」(引用1) と訳されている。しかし、「Romeo and Juliet」は「West Side Story」を「インスパイア」しているが、通常、それを「形成」している、あるいは「生み出している」とはいわない。その為、先の引用4では「gives rise to」を邦訳の「形成」ではなく、「インスパイア」に合わせて「影響を与え、もともになる」に変えている。

LRMは5.8の別の箇所で、逐次刊行「著作」が各号の製作を「導く」(guide) と表現している。少なくとも日本語で考える限り、こちらの表現の方が理解しやすく、「集合化著作」との違いも明確になる。逐次刊行「著作」は各号の「集合化著作」を「インスパイア」＝ガイドし、そのもともになる「広範な計画」なのである。以後、逐次刊行「著作」に関するLRM-R21については「インパイア」＝ガイドと表記する。

「Romeo and Juliet」の「著作」は「West Side Story」の「著作」を「インスパイア」しているが、前者の「著作」と後者の「著作」は当然異なるし、両者が全体と部分の関係にあるはずもない。同様に、逐次刊行「著作」は各号の「集合化著作」を「インスパイア」＝ガイドしているが、それらを集めた全体ではないし、各号の収録記事等の「著作」を集めたものでもない。これが特質C（「著作」側）である。

一方、各系列の「表現形」の在り方は、これまで指摘してきた「著作」と「表現形」とは様相が異なる。先の図1の雑誌がいわゆる3号雑誌で廃刊となったと仮定して、完結した全体をモデル化したものを以下に示す。煩雑になるので、各号のコンテンツについては創刊号のみ表記している。

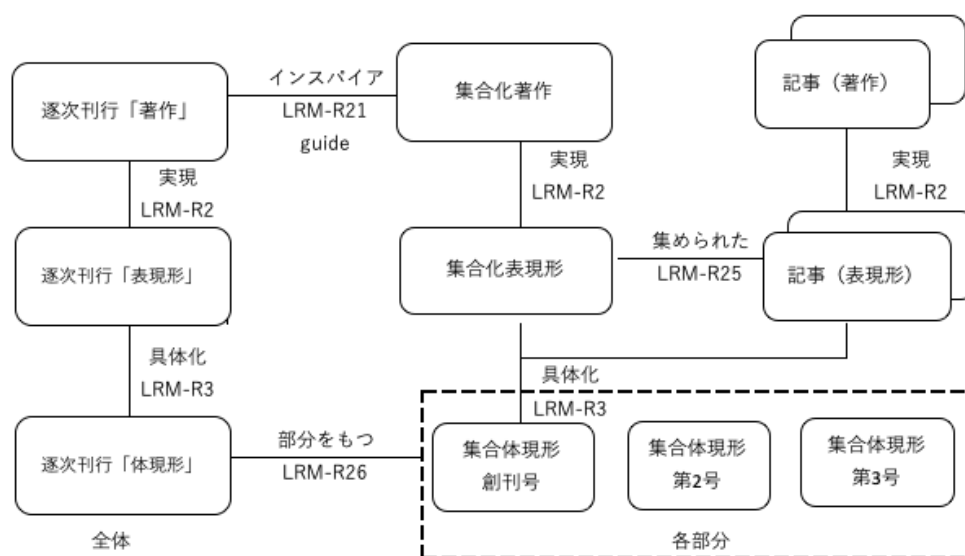


図2

1～3号の「集合体現形」はすべて、ひとつの逐次刊行「体現形」に統合される。逐次刊行「体現形」は各号の「集合体現形」を部分とする全体 (LRM-R26) なのである。これが特質C (「体現形」側) である。

最後の特質Dについて、LRMは次のように指摘している。

結論として、すべての逐次刊行著作は、ただ1つの表現形とただ1つの体現形をもつといえる。<sup>8</sup> (引用5)

引用5の「表現形」は逐次刊行「表現形」、「体現形」は逐次刊行「体現形」を指している。逐次刊行「著作」と逐次刊行「表現形」そして逐次刊行「体現形」は、それぞれ1対1対応するわけである。「レクチャー」はこの特質Dを、WEM「ロック」(WorkとExpressionとManifestationの“lock”)と呼んでいる。<sup>9</sup>

一方、「レクチャー」は、「集合体」では「集合化著作」と「集合化表現形」が「ロック」されると説明している (次節引用6)。つまり、「集合体」の場合、「集合体現形」は「ロック」されず、WorkとExpressionの“lock”=WE「ロック」になる。

逐次刊行「著作」はキャリアまでカバーしているので、「ロック」の範囲が「集合化著作」より「広範」になっている。本論で「集合体」の「集合化著作」を「編集コンセプト」、逐次刊行物の逐次刊行「著作」を「計画」という形で使い分けるのは、両者のこうした差異を明示する為である。

他の「著作」において、WEM「ロック」はあり得ない。「著作」の定義は「個別の創造の知的・芸術的内容」だが、それが直接、キャリアの決定に関与することはないからである。例えば、バッハの「ブランデンブルク協奏曲」の「知的・芸術的内容」が、収録されるメディアを「ロック」(例えばレコードオンリーと)するはずもない。

「編集コンセプト」や「計画」の場合、そこではキャリアは一切考慮されていないと主張するのは逆に無理がある。特に逐次刊行物の「計画」の場合、キャリアの発行頻度と形式はその最も重要な要素とさえいえる。逐次刊行「著作」=「計画」が内容だけでなく、キャリアもフィックスする、つまりWEM「ロック」なのは、ある意味当たり前なのである。

一方「集合体」はWE「ロック」なので、その「編集コンセプト」にキャリア関連は含まれていないことになる。しかし、確かに逐次刊行物の場合ほど重視されていないかもしれないが、編集段階でキャリアの形式がまったく考慮されていないとは考えづらい。

「レクチャー」は「集合体」についてはそうした要素をあえて切り捨て、「編集コンセプト」の範囲を意図的に狭めている (理由については次節で言及する)。つまり、逐次刊行「著作」=「計画」の範囲が「広範」というよりも、むしろ「集合化著作」=「編集コンセプト」の範囲が限定されていると考える方が実情に即している。

「集合化著作」と逐次刊行「著作」を考える際、重要なのは両者の同質性ではなく、差異

の方なのである。

## 第2節 WE「ロック」

最初に基本を再確認しておく、「著作」と「表現形」の多重度は通常、1対多である。つまり、ひとつの「著作」は複数の「表現形」によって「実現」され得る。だが、「集合化著作」と「集合化表現形」の多重度は1対1であり、「集合化著作」はひとつの「集合化表現形」しかもてない。「集合化表現形」が別であれば「集合化著作」も必ず別になる（対偶）。これがWE「ロック」（WとEの多重度1対1）であり、異例といえる。

一方、「集合体現形」は「集合化表現形」に「ロック」されないので、「集合化表現形」と「集合体現形」の多重度は通常通り、多対多のままである。

WE「ロック」について、「レクチャー」は以下のように説明している。以下の引用では、原語「aggregate」を「集合体」と訳し、原語「presentation」を補っている。

集合化著作の本質は、集合体（aggregate）をどのように組み立てるかについての計画である。これは、最終的な成果物のテーマ、スタイル、構成、公開方法（presentation）に関する編集上の決定で構成され、部品をつなぎ合わせる接着剤またはモルタルと言え。集合化著作の性質が計画である以上、計画が変更されると、新しい計画、つまり、確実に以前の集合化著作に基づいたものであるが、新しい集合化著作になる。集合化著作の性質に関するこの見方から、集合化著作は1つの表現形のみを持つことができるということになる。つまり、集合化著作とその集合化表現形の間には「ロック」があるため、常に1対1である必要がある。<sup>10</sup>（引用6）

邦訳は冒頭の前語「aggregate」を「集合体」ではなく、「集合体現形」と訳している。

集合化著作の本質は、集合体現形をどのように組み立てるかについての計画である。

だが、このように訳した場合、「集合化著作」と「集合化表現形」だけでなく、「集合体現形」まで「ロック」される=WEM「ロック」になってしまうので、「レクチャー」の主張と齟齬する。（←補遺1）「集合化著作」はあくまでも「集合体」（aggregate）の収録作品（コンテンツ）をどのように「選択、組立、配列」するかについての「編集コンセプト」（引用6では「計画」）なのである。

「レクチャー」は引用6に続いて、次のように指摘している（邦訳を一部改変）。

ただし、他の表現形に複数の体現形があるのと同様に、集合化表現形は複数の体現形に具体化できる（もちろん、集められた表現形の詰め合わせは同じままで）。たとえば、アンソロジーや会議録は印刷物としても電子ブックとしても出版されることがあり、

また、別の出版者から再版される場合もある。<sup>11</sup> (引用7)

「アンソロジーや会議録」(「集合体」)の場合、「集合化著作」と「集合化表現形」はそれぞれの「集合体」でひとつだけだが、「集合体現形」(キャリア)はひとつに限定されない。

先の引用6にある「公開方法」(presentation)はキャリアの「発行」ではない。キャリアの「発行」であれば「publication」あるいは「issue」を使うはずだからである(引用1参照)。

「集合体現形」(キャリア)は「集合化著作」=「編集コンセプト」による「ロック」の範囲外なのである。

仮に「集合化著作」がWEM「ロック」だった場合、「集合化著作」はひとつの「集合体現形」しかもつことができなくなってしまう。つまり、同じ「集合体」の印刷物と電子ブックは異なる「集合体現形」なので、それぞれ別の「集合化著作」として完全に分離した形でモデル化されることになる。「レクチャー」が「集合体現形」(キャリア)を「編集コンセプト」の範囲から除外したのは、そうした事態を防ぐ為なのである。

しかし、「ロック」の範囲を「集合化表現形」に限定しても、問題がすべて解消されるわけではない。通常、「著作」と「表現形」の間には以下のような関係がある。<sup>12</sup>

著作	表現形	変化
同じ	同一	綴りや句読点等の修正のような小さな変更 A
	同等 (複数)	形式の変更・知的慣習や手段の変更・改訂・翻訳 B
異なる	別種	文学形式・芸術形式から他の形式への改作・翻案 C

図3

例えば音楽作品の場合、同じ曲(「著作」)が様々な形で演奏(「表現形」)されるが、そうした演奏(「表現形」)は「B」(同等)とみなされる。つまり、同じ「著作」の異なる「表現形」としてモデル化される。

だが、「集合体」の場合はWE「ロック」される為、同じ「集合化著作」の異なる「集合化表現形」は認められない。その為、「集合体」では「B」(同等)の選択肢は排除される。「集合化表現形」は、「A」(マイナーチェンジ) = 同じ「集合化著作」のままか、「C」(リライト) = 別の「集合化著作」とみなされるかの2択なのである。

集合化著作	集合化表現形	変化
同じ	同一	マイナーチェンジ A
		同等 B
異なる	別種	改作 (リライト) C

図4

具体的な例で考える。例えば、短編小説集の収録作品の「選択」(selection)が変わり、入れ替えられた場合、引用7の訳語を使えば「詰め合わせ」(selection)が変えられた場合、通常は異なる「集合化著作」=「編集コンセプト」、つまり「C」(リライト)とみなされる。



図5

一方、収録作品の「選択」は同じで、「配列」だけが変更された場合は「B」(同等)、つまり同じ「集合化著作」の異なる「集合化表現形」のように思える。



図6

だが、これはWE「ロック」に反するので、「配列」が変更されただけの場合は「B」(同等)ではなく「A」(マイナーチェンジ)とみなされる。それは「編集コンセプト」の小変更に過ぎず、異なる「集合化表現形」ではなく、同じ「集合化著作」の同じ「集合化表現形」としてモデル化される。「配列」の変更については、「集合体現形」の違いとして処理されることになる。

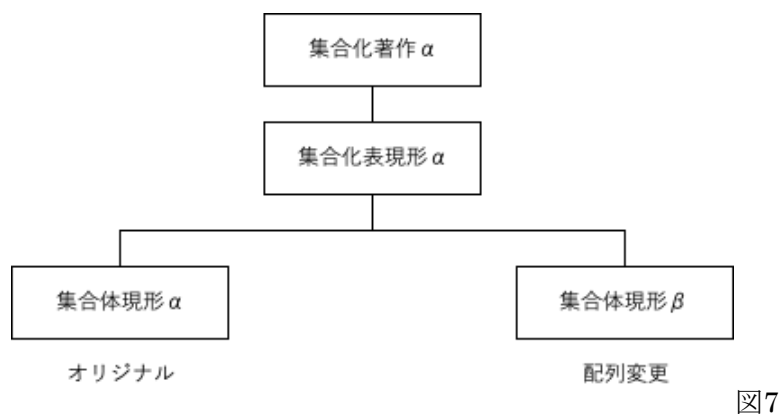


図7

ここまでは問題ない。しかし、翻訳において問題が表面化する。単独の小説、例えばレイ・ブラッドベリの小説「Fahrenheit 451」とその翻訳である「華氏451度」は、「B」（同等）=同じ「著作」の異なる「表現形」として、次のようにモデル化される。

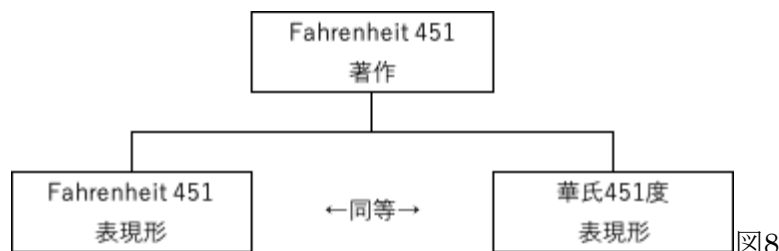


図8

同じブラッドベリの短編小説集「The Illustrated Man」とその翻訳である短編小説集「刺青の男」も、収録作品についてであれば、「Fahrenheit 451」と「華氏451度」と同様に「B」（同等）としてモデル化できる。



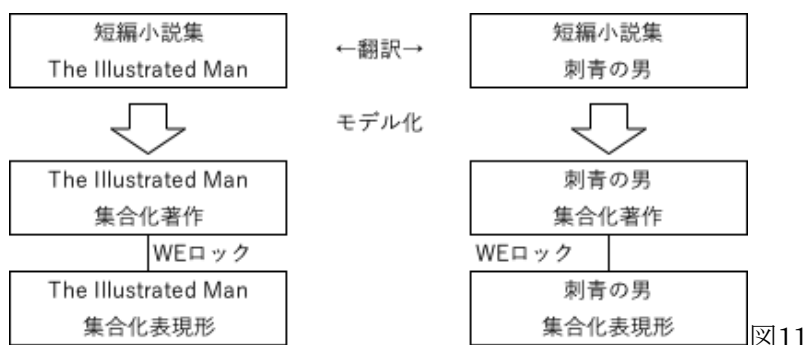
図9

しかし、既に指摘したように、「集合体」を代表するのは「集合化著作」であり、収録作品の「著作」ではない。そして、「The Illustrated Man」と「刺青の男」の「集合化著作」と「集合化表現形」を「B」（同等）としてモデル化するのは、明らかにWE「ロック」に反している。



「The Illustrated Man」の「集合化著作」＝「編集コンセプト」は、LRMの定義（引用2）に従えば、収録作品（英語）を「選択、組立、配列」することである。一方、「刺青の男」の「編集コンセプト」は翻訳作品（日本語）を「選択、組立、配列」することである。

両者の関係は少なくとも「A」（マイナーチェンジ）ではなく、「B」（同等）か「C」となる。だが、WE「ロック」である以上、「C」（別の集合化著作）しか選択できない。



だが、収録作品が翻訳関係にあるにも拘らず、単行作品の場合と「集合体」の場合で扱い方が変わるというのは直感に反するし、ユーザーニーズにも合致しない。しかし、「レクチャー」の主張（WE「ロック」）に従う限り、それを避けることはできないように思える。この問題については第4節で再考する。

### 第3節 逐次刊行物のWEM「ロック」

「逐次刊行「著作」は、WEM「ロック」される。つまり、ただひとつの逐次刊行「表現形」によって「実現」され、その逐次刊行「表現形」もまた、ただひとつの逐次刊行「体現形」によって「具体化」される。「表現形」と「体現形」の多重度は通常、多対多なので、逐次刊行「表現形」と逐次刊行「体現形」が1対1対応するWEM「ロック」はやはり異例といえる。（←補遺2）

第1節で指摘した通り、逐次刊行「物」が同じかどうかは通常、キャリアによって判断される。例えば、「ISSN」（International Standard Serial Number: 国際標準逐次刊行物番号）では、逐次刊行物に別の番号を付与する（異なる逐次刊行物として扱う）ケースとして、以下のふたつを挙げている（以下は試訳）。<sup>13</sup>

次の2つのケースでは、新しいISSNを申請しなければならない：  
出版物の媒体が変わるケース（例：印刷雑誌がオンライン雑誌になる）  
出版物のタイトルが変わるケース（引用8）

「媒体」（medium）あるいはタイトルが変われば別の逐次刊行物とみなすという、明確なルールである。雑誌がオンライン化された場合、仮にタイトルとコンテンツ（記事等）が印刷版とまったく同じであっても、それは別の逐次刊行物とみなされる。

しかし、既に指摘した通り、LRMと「レクチャー」は逐次刊行物についても、コンテンツの側から説明しなければならない。タイトルとコンテンツが同じなのに別の逐次刊行物である理由を、コンテンツ側からどう説明するのか。「レクチャー」は次のように述べている（一部原語を補った）。

逐次刊行物の形式と頻度は逐次刊行著作の計画の一部であるため、同じ内容を別の形式で発行（issue）する計画（たとえば、日刊紙の新聞を月刊のマイクロフィルムとして発行するなど）は、関連しているとはいえ、実際には異なる計画である。<sup>14</sup>（引用9）

この議論の核心は、逐次刊行物全体の独自コンテンツをモデル化した逐次刊行「著作」＝「計画」に「発行」（issue）が含まれていることである。

オンライン版の逐次刊行「著作」＝「計画」には当然、「発行」されるキャリアの形式が含まれている。そして、印刷版の「計画」にも同じようにキャリアの形式が含まれている。つまり、両者の「計画」は同じではない。そして、異なる逐次刊行「著作」＝「計画」に基づいて「発行」されたものは、仮にタイトルとコンテンツが同じであっても、異なる逐次刊行物とみなされる。

このようにして「レクチャー」は逐次刊行物の異同の基準を、キャリアから逐次刊行「著作」＝「計画」に置き換えたのである。「レクチャー」はこうも指摘している。

ISSNやキー・タイトルなどの逐次刊行物の従来の識別子は、逐次刊行物の体現形ではなく、逐次刊行著作の識別子としてより便利であると見ることができる。<sup>15</sup>（引用10）

逐次刊行「著作」＝「計画」を主役に据えることによって、キャリアの識別子を「逐次刊行著作の識別子」に転用することが可能になる、というわけである。

第1節で指摘した通り、LRMは逐次刊行「著作」＝「広範な計画」が同一のまま、変化することを認めている。ただそれは、コンテンツに関する「計画」の変更に限られる。そうした変更は多くの場合「A」（マイナーチェンジ）とみなされ、同じ逐次刊行「著作」のままとなる。一方、キャリア（媒体）の「計画」変更は「C」つまり別の逐次刊行「著作」への変

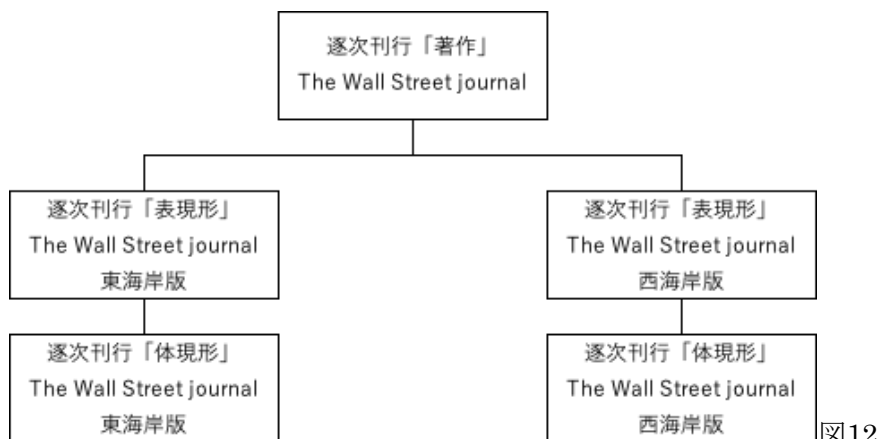
化とみなされるのである。(←補遺3)

重要なのはWEM「ロック」が「B」(同等)を認めないことである。ひとつの逐次刊行「著作」が「同等」の異なる逐次刊行「表現形」や逐次刊行「体现形」をもつことは許されない。

LRMはそうしたWEM「ロック」の反例候補として、「The Wall Street journal」の東海岸版と西海岸版(editions)を取り上げている。このケースについて、LRMは次のように述べている(邦訳を一部改変し、原語を補った)。

ここで「版」という用語を使用したことで、しばしば同一著作に属する2つの表現形を指す単行書の版表示と類似しているという印象を与えてしまう。しかし、逐次刊行著作の場合、その本質は成果物としての集合体现形から成る各号の製作を導く編集コンセプトにある為、地域版間の違いは、関係はあるが別個に存在するふたつの異なる逐次刊行著作を形成(result)するのに十分(sufficient)である。<sup>16</sup>(引用11)

このケースについては、ひとつの逐次刊行「著作」がふたつの逐次刊行「表現形」によって「実現」され、それぞれ異なる逐次刊行「体现形」によって「具体化」されているという考え方が成立するように思える。仮にそれが正しければ、確かにWEM「ロック」の反例となる。



しかし、LRMが指摘する通り、こうした考え方は誤っている。逐次刊行「著作」はキャリアの設計図まで含む「広範な計画」であり、同じ設計図から別のキャリアが「発行」されることはない。「The Wall Street journal」の東海岸版と西海岸版は、ふたつの異なる逐次刊行「著作」=「計画」として、WEM「ロック」の形でモデル化されなければならない。

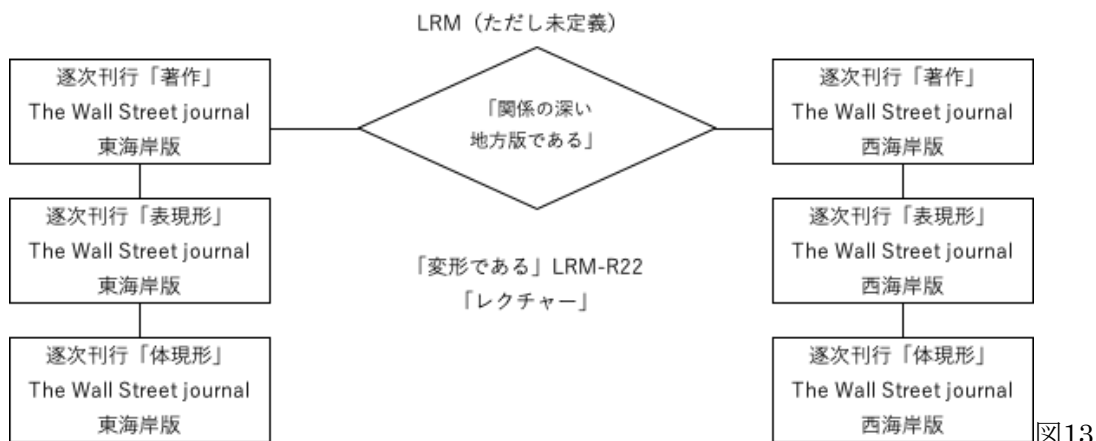


図13にある通り、LRMはこのケースの逐次刊行「著作」を完全に分離した上で、その結びつき方を「関係の深い地方版である (is a sibling local edition of)」という「関連」で復元することを提案している。<sup>17</sup>ただ、この「関連」は言及されるだけで、具体的に定義はされていない。一方「レクチャー」はこうした「地方版」について、異なる「著作」の「関連」「変形である」(LRM-R22)に該当すると述べている。<sup>18</sup>

LRMはWEM「ロック」の反例候補について、さらにふたつのケースを取り上げて共に退けている。<sup>19</sup>なお、以下の説明は「レクチャー」に基づいたものであり、LRMの説明とは異なる。

ひとつは、雑誌Bが雑誌Aの「翻訳」であるケース $\alpha$ である。収録作品についていえば、このケースではふたつの雑誌が「翻訳」関係にあるので、同じ「著作」の異なる「表現形」としてモデル化される。

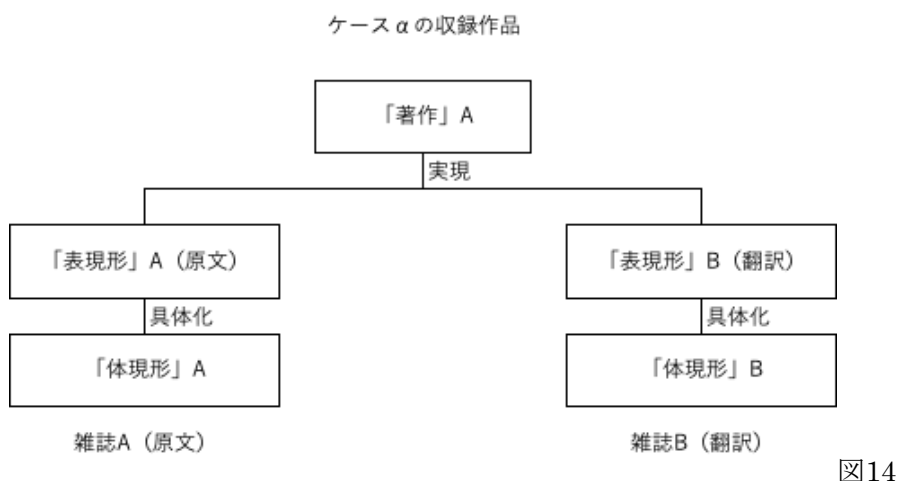


図14はWEM「ロック」に反している。しかし、何度も指摘している通り、収録作品の「著作」の系列はWEM「ロック」やWE「ロック」の対象ではないので、問題はない。

一方、雑誌Bの逐次刊行「著作」＝「計画」は、雑誌Aの内容を翻訳し、それを別の媒体で発行することである。そこに別の媒体での発行計画が含まれている以上、雑誌Bの逐次刊行「著作」は雑誌Aの逐次刊行「著作」とは別物である。

雑誌Aと雑誌B（翻訳）はそれぞれWEM「ロック」の形でモデル化されるのである。

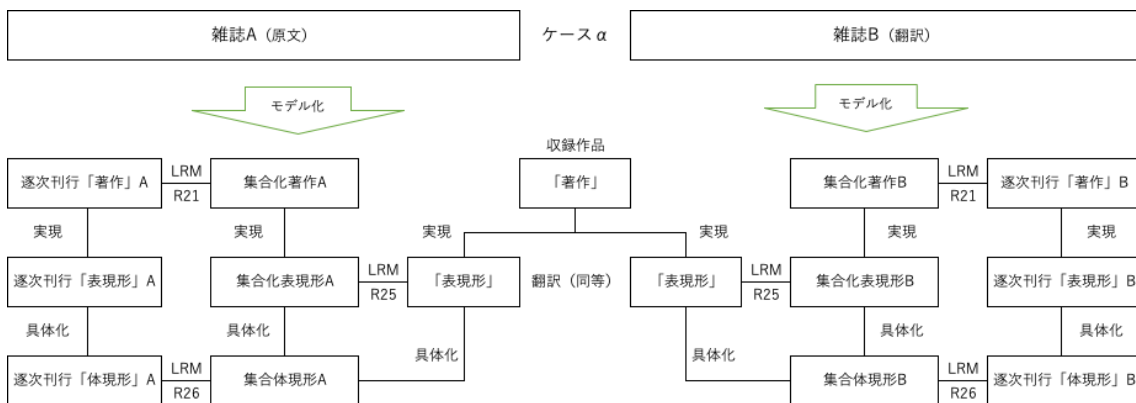


図15

もうひとつは、雑誌Dが雑誌C（印刷版）のPDF（オンライン）版のケースβである。印刷物がPDF（オンライン）化された場合、収録作品については、通常通り、同じ「著作」と「表現形」の異なる「体现形」としてモデル化される。

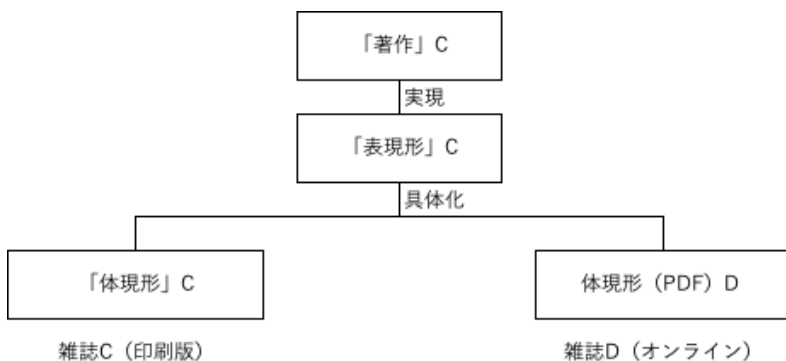


図16

しかし、逐次刊行「著作」の場合、雑誌Cの「計画」と雑誌Dの「計画」には、それぞれ異なる媒体による発行計画が含まれているので、両者の逐次刊行「著作」は別物と判断される。その為、雑誌Cと雑誌Dはケースαと同様に、WEM「ロック」の形で以下のようにモデル化される。ケースαとの違いは、収録作品の「表現形」が「同等」ではなく、「同一」である点だけである。

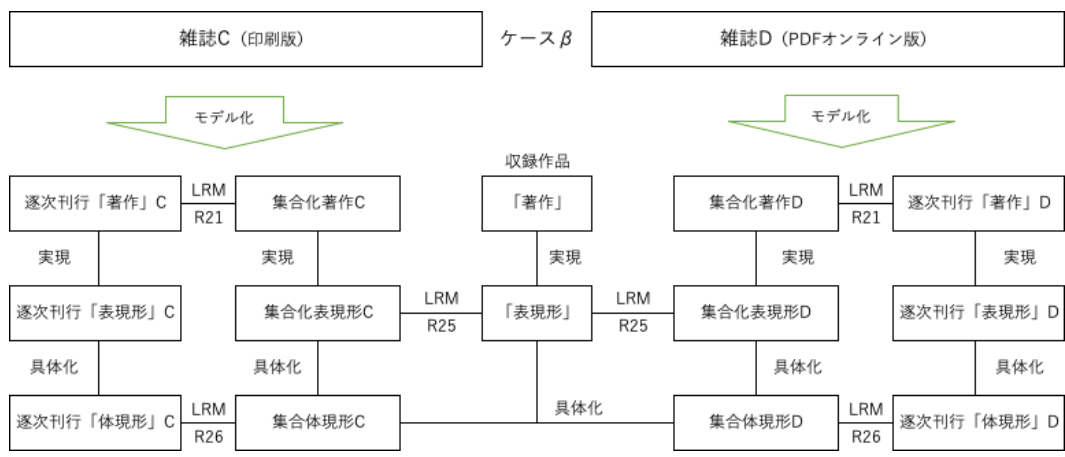


図17

このふたつのケースがWEM「ロック」の反例のように思えるのは、収録作品の「著作」系列と逐次刊行「著作」の系列を混同しているからなのである。

#### 第4節 内部構造

第4節と第5節では、「集合化著作」と逐次刊行「著作」について、LRMや「レクチャー」とは異なる、オルタナティブな解釈を提示する。

これまで見てきた通り、「レクチャー」では「計画」という言葉が重用されている。また、LRMは逐次刊行「著作」について、「出版者と編者の意図 (intention)」<sup>20</sup>にあると説明している。

しかし、既に第7章補遺4で指摘したように、こうした「意図」や「編集コンセプト」そして「計画」による説明はリスクであり、他の「著作」の説明には登場しない。<sup>21</sup>

例えば、「Romeo and Juliet」のような単独作品の場合、「著作」はあくまでも完成したテキストの「知的・芸術的内容」であり、シェイクスピアの「意図」や「計画」はそもそもモデル化の対象ではない。仮にシェイクスピアの「意図」や「計画」を記したテキストがあったとしても、それは「Romeo and Juliet」とは別の、独立した作品として扱われる。

一般的に、単独作品のモデル化プロセスは以下のように単純化することができる。

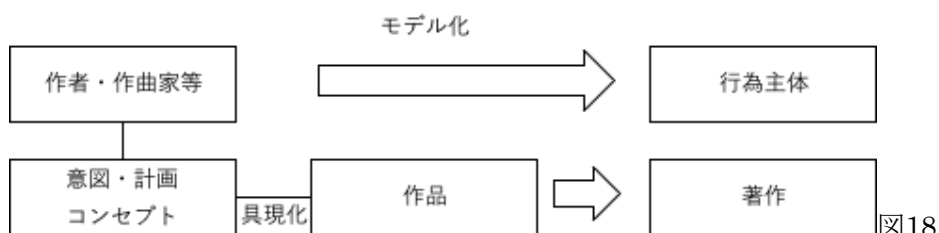


図18

この図18の中で、モデル化の対象は「作者」と「作品」(creation)だけである。「意図」

や「計画」は「作者」＝「行為主体」に属している。「著作」としてモデル化されるのは「意図」や「計画」自体ではなく、それらが具現化された「個別の創造の知的・芸術的内容」の方である。「意図」や「計画」は「作品」＝「創造」(creation)ではなく、「創造」の前段階における「想像」(imagination)でしかない。

あるいはLRMや「レクチャー」は、「意図」や「計画」自体が「作品」に内在していると考えているのかもしれない。だが、それは旅の計画内容と実際の旅の内容を混同するに等しい。実際の旅は、あるいは「計画」通りかもしれないが、まったく別になるかもしれないのである。

「集合体」の場合も同様である。「集合化著作」は「編集コンセプト」と定義されているが、「編集コンセプト」それ自体はモデル化の対象ではない。モデル化されるのは「編集コンセプト」が具現化した「集合体」の収録作品及びその「組立」と「配列」の結果としての内部構造である。

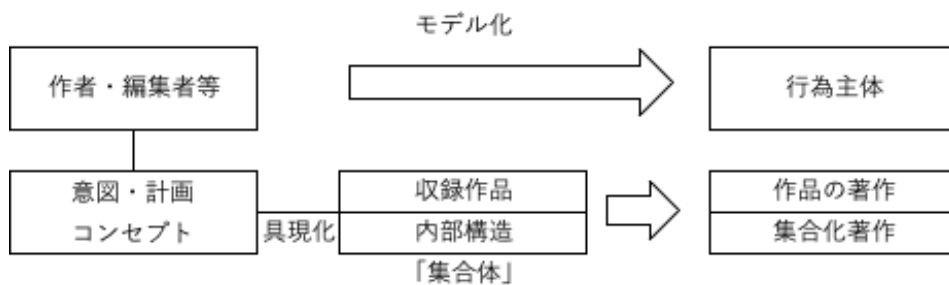


図19

第7章で指摘した通り、「古今和歌集」は撰者の「編集コンセプト」に基づく独自の構造(部立て等)を有している。<sup>22</sup>それは、収録作品の選択、組立、配列の結果(独自の成果)であり、収録作品の単純な総和には還元されない「意味」あるいは「価値」を有している。「集合化著作」は、そうした内部構造をモデル化したものと考えることができる。

内部構造の重要性については、ダイヤモンドと黒鉛の例が参考になる。両者は共に単一の元素＝炭素(carbon)で構成されている。しかし、炭素原子の結合の仕方と構造が異なる為、まったく異なる特性をもった物質(同素体)となる。「集合体」の比喩としては、同素体よりも、同じ複数の元素で構成されているが結合の仕方が異なる異性体(例えばエタノールとジメチルエーテル)の方がより適切かもしれない

いずれにせよ、そうした物質の性質は構成要素(元素)だけでなく、内部構造の違いによって決まる。「集合体」に戻って簡単な式で表せば、「集合体」の「知的・芸術的内容」＝収録作品の「知的・芸術的内容」＋内部構造の「知的・芸術的内容」となる。この等式の右辺がふたつの「著作」系列としてモデル化されるわけである。

こうした議論を踏まえると、第1節で引用したLRM-E2「著作」のスコープ・ノートの説明(引用2)は、創造プロセスを遡行し過ぎていることが分かる。以下に再度、引用する。

著作の本質は、結果的に集合体現形として具体化される、他の著作の表現形の選択、組立、配列に関するconcept or planである。

この「concept or plan」は創造プロセスの出発点だが、「著作の本質」は到達点である作品の「知的・芸術的内容」である。よって、この一節は次のように書き直すことができる。

「集合化著作」の本質は、concept or planに基づく他の「著作」の「表現形」の選択、組立、配列の成果としての内部構造であり、それが結果的に集合体現形 (aggregate manifestation) として具体化される。

このように「集合化著作」を「編集コンセプト」ではなく、「集合体」の内部構造をモデル化したものとするならば、第2節で取り上げた「集合体」の翻訳問題についても、解決の目処が立つ。

短編小説集「刺青の男」は、原作である短編小説集「The Illustrated Man」の収録作品を翻訳している。だが、内部構造については少し考慮する必要がある。

短編小説集「The Illustrated Man」の場合、集められた短編小説がプロローグとエピローグに挟まれる形で配列されている。それを翻訳した短編小説集「刺青の男」も同様の配列となっている（厳密には訳者の解説等の差異がある）。その内部構造は原作を踏襲（あるいは流用）した同等のものとみなすことができる。勿論、構成要素（原作とその翻訳）が異なるので、両者の内部構造は同等ではあるが同一ではない。

こうした考え方に従えば、短編小説集とその翻訳は、単独の小説「Fahrenheit 451」とその翻訳である「華氏451度」と同じようにモデル化できる。

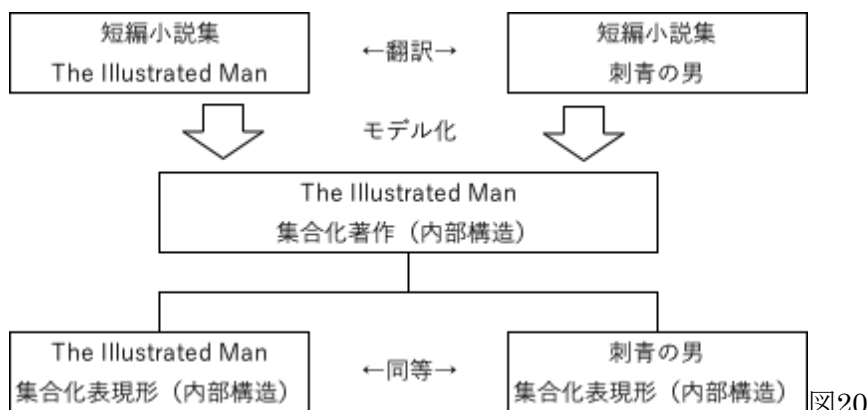


図20

「集合化著作」を「編集コンセプト」ではなく「集合体」の内部構造をモデル化したものとするならば、「集合化表現形」が「同等」である可能性が復活する。その為、「集合化表

現形」も、単独作品の「表現形」と同様に、「A」(マイナーチェンジ)、「B」(同等)、「C」(リライト)の3択に戻る。つまり、WE「ロック」は消滅するのである。

集合化著作	集合化表現形	変化		
同じ	同一	マイナーチェンジ	配列の変更	A
	同等 (複数)	同等の内部構造	翻訳	B
異なる	別種	改作 (リライト)	収録作品の入れ替え	C

図21

収録作品は同じだが、それらの「配列」が異なる短編小説集は内部構造の「マイナーチェンジ」なので、「A」=同じ「集合化著作」の同じ「集合化表現形」(の異なる「集合体現形」)としてモデル化される。

短編小説集の翻訳は、「B」(同等)の内部構造とみなされ、原作と同じ「集合化著作」の異なるふたつの「集合化表現形」として扱われる(図20)。

そして、収録作品が入れ替えられた短編小説集は、「C」(リライト)とみなされ、別の「集合化著作」(別の「集合体」)になる。

「集合化著作」と「集合化表現形」の多重度は通常と同じ1対多に戻るのである。

### 第5節 ムーブメント (movement)

逐次刊行「著作」は他の「著作」は勿論、「集合化著作」とも異なる特殊な「著作」なので、もう少し事情が込み入ってくる。以下に、単独作品と「集合体」と同様に、逐次刊行物を単純化した図を提示する。ただし、この図22は誤っていることを予め指摘しておく。

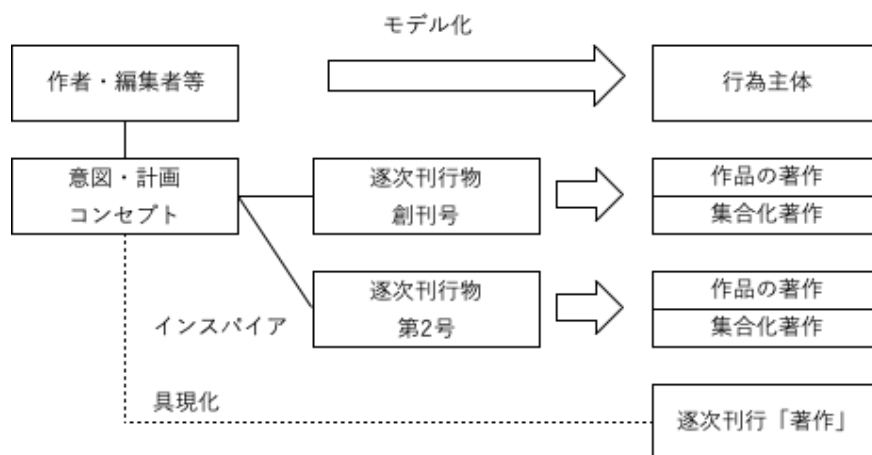


図22

「集合体」の場合、「編集コンセプト」は内部構造として具現化され、それが「集合化著作」としてモデル化されていた。しかし、逐次刊行物の場合、刊行された各号（の集まり）以外、「意図」や「計画」が具現化した対象はないように思える。

その為、LRMや「レクチャー」は、「意図」や「計画」を逐次刊行「著作」に直結させる道（図22の点線）を選んだのだろう。

しかし、実は刊行された各号（の集まり）以外にも、逐次刊行物の「意図」や「計画」が具現化されたものが存在している。それは「ムーブメント」（movement）である。

「ムーブメント」で有名なのは、いわゆる「公民権運動」（Civil Rights Movement）のような社会運動だが、文化や芸術のジャンルにおいても、例えば「フラワー・ムーブメント」のように、特定の主張やコンセプトに基づいた持続的な活動について用いられる。

そして、IOC（国際オリンピック委員会）の「オリンピック憲章」でも、この「ムーブメント」という言葉が使われている。オリンピックもまた、一種の「ムーブメント」なのである。

以下に、同憲章の「オリンピズムの根本原則」から、「オリンピック・ムーブメント」に関する言説を抜粋して示す。

オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。

オリンピック・ムーブメントは、オリンピズムの価値に鼓舞された個人と団体による、協調の取れた組織的、普遍的、恒久的活動である。<sup>23</sup>（引用12）

過去に開催されたオリンピック競技会は、「オリンピック・ムーブメント」の推進機関であるIOCによる「インスパイア」＝ガイドに従って、個別の組織委員会が実際の準備と運営を担い、それぞれ異なるコンセプトの下で開催されている。個別のオリンピック（競技大会）はすべて、「オリンピック・ムーブメント」が結実した成果なのである。

しかし、「オリンピック・ムーブメント」は個別のオリンピック（競技大会）すべてを合わせたものに還元されるわけではない。それは未来に向かう「運動」そのものを指しているのである。

以下に概略図を提示する。

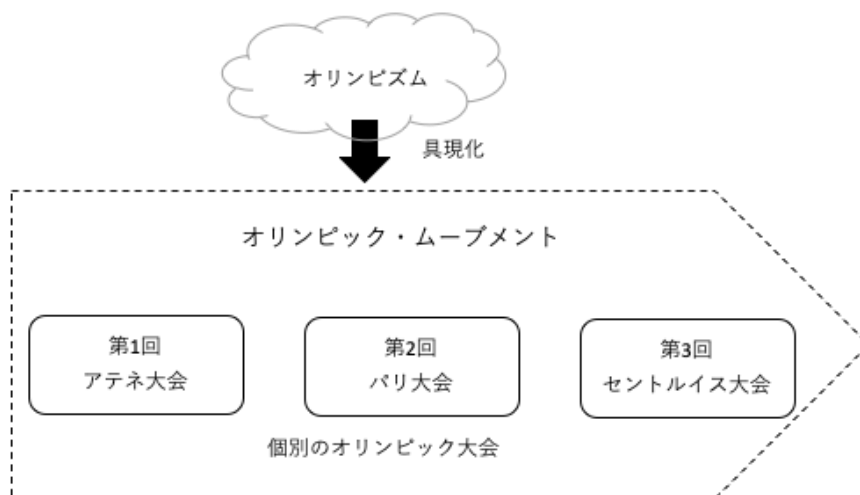


図23

こうした広い意味の「ムーブメント」は、「オリンピック」以外にも多数存在している。例えば、毎年開催される伝統的な祭りや2年ごと（ビエンナーレ）あるいは3年ごと（トリエンナーレ）に開催される美術展、さらに各種の音楽祭（バイロイト音楽祭やニューポートジャズフェスティバル等）も「ムーブメント」の一種と考えることができる。

例えば、有名なヴェネチア・ビエンナーレのこれまで開催された各美術展は、当然、毎回すべて異なっている。だが、それらはただひとつの「ムーブメント」の成果として認識されるのである。

逐次刊行物もまた、こうした「ムーブメント」の一種と考えることができる。雑誌の創刊は単なる書籍の出版ではなく、ひとつの「ムーブメント」が立ち上げられたことを意味する。逐次刊行「著作」はこうした「ムーブメント」をモデル化したものであり、創刊と同時に、ひとつだけ存在し始める（特質A）。

「ムーブメント」＝逐次刊行「著作」は、個別の号を「インスパイア」＝ガイドする（特質B）が、それらの「著作」を集めたものに還元されない（特質C）。また、個別の号を集めた全体（逐次刊行「体现形」）とも異なる。それは、個別の号を増やしながら続く、未来に向けた「運動」それ自体なのである。

出版者や编者、その「意図」や「計画」、「ムーブメント」、そして逐次刊行「物」の各号は、すべて分離して考えなければならないのである。

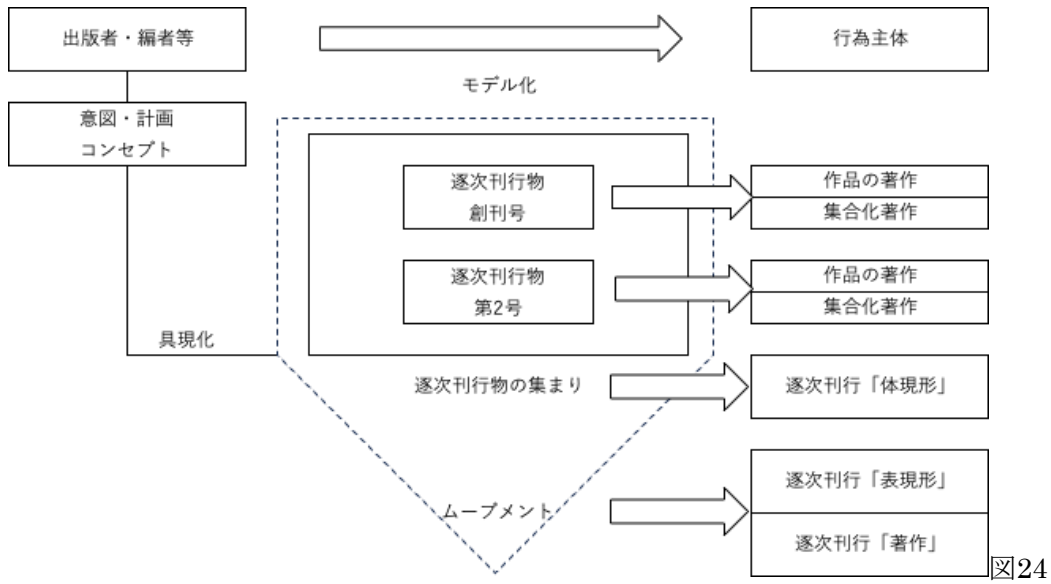


図24を図2と図23を合わせた形に変形し、逐次刊行物の全体像として提示する。

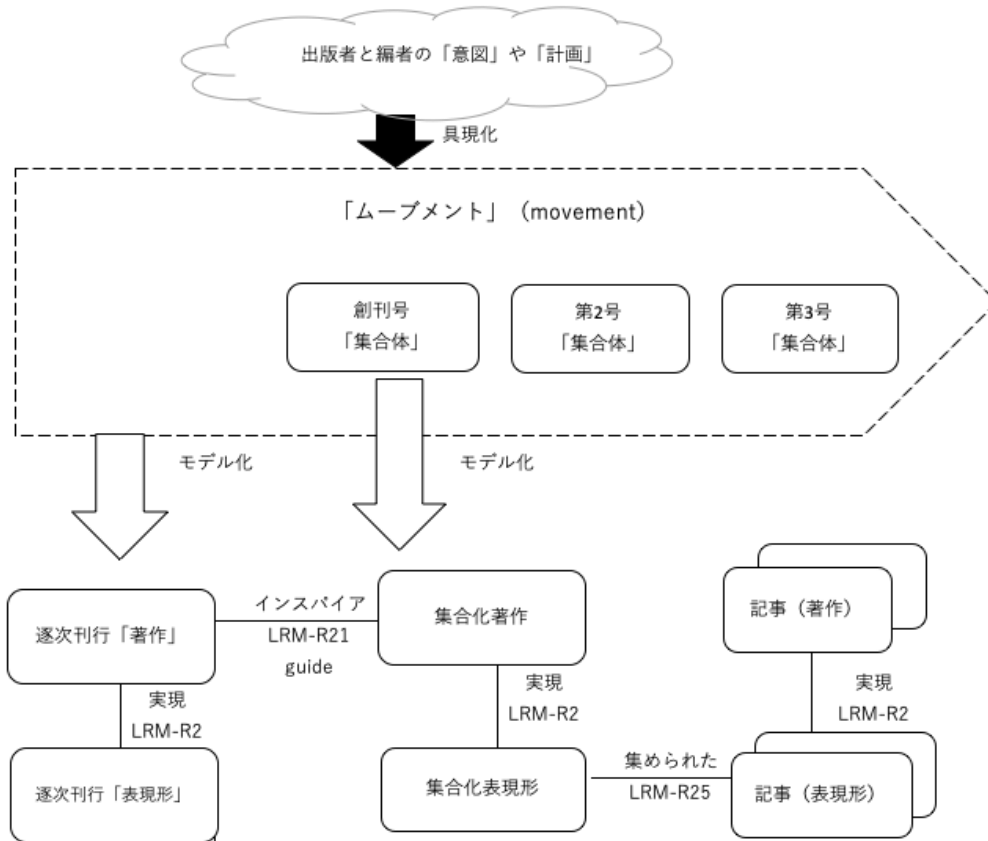


図25

再び「集合体」に戻ると、それはビエンナーレのような「ムーブメント」ではなく、単独開催の美術展に相当する。そこでは何らかのテーマに沿って、様々な作品が「選択、組立、配列」されている。同じ内容のそれが他の美術館で開催される、いわゆる巡回展は再版に当たると考えることができる。

美術展の会場入り口には通常、主催者の「意図」や「計画」を記したパネルが表示されている。だが、それがそのまま美術展の「知的・芸術的内容」というわけではない。第4節と同様に簡単な式で表せば、美術展の「知的・芸術的内容」＝展示作品（主催者の「意図」パネルを含む）の「知的・芸術的内容」＋展示構造の「知的・芸術的内容」となる。

こうしたオルタナティブな解釈では、「集合化著作」（内部構造）と逐次刊行「著作」（「ムーブメント」）はまったく異なる「著作」なのである。

#### 「IFLA LRM試論（7）－LRM5.8「逐次刊行物のモデル化」了

##### 補遺1

「集合体」（aggregate）は逐次刊行物と同様に、モデル化前の資料分類であり、「集合体現形」（aggregate manifestation）はその名の通り、「著作」や「表現形」と同じ、モデル化後の「実体」なので、カテゴリーが異なる。

例えば、「レクチャー」は「合冊」と「aggregates」を次のように比較している。

所謂「合冊」のモデリングは、集合体現形の議論と併せて取り上げられることがよくあるが、基本的に異なる現象である。集合体現形では、表現形を集約することによって、複数の個別資料を持つ可能性のある体現形が常に作成される（ただし、シングルトンである可能性もある）。一方で、「合冊」は、複数の体現形から特定の個別資料が、図書館あるいは前所有者によって、単一のオブジェクトとして物理的に合冊されるときに作成される。<sup>24</sup>（引用 13）

引用 13 の「集合体現形」の原語はすべて「aggregates」である。だが、「合冊」と「集合体現形」を比較するのはカテゴリーミステイクである。「合冊」と比較されるのは、同じモデル化前の対象である「集合体」（この場合は複数の公用語を持つ国家の政府文書等）でなければならない。

一方、「レクチャー」には次のような一文もある（原語を補入した）。

逐次刊行物の一つの号は、集合体現形（aggregate manifestation）であり、すべての記事の表現形、また、その号の集合化著作の集合化表現形を体現する。<sup>25</sup>（引用 14）

この一文で指摘されている通り、「逐次刊行物の一つの号」は確かに「集合体現形」

(aggregate manifestation)としてモデル化される。だが、その事実は「逐次刊行物の一つの号」がモデル化以前に「集合体」(aggregate)であることと何ら矛盾しない。

モデル化される前の「逐次刊行物の一つの号」は、LRM が指摘する通り、「記事の集合体」(aggregates of articles)である。<sup>26</sup>そして、その「集合体」は「すべての記事の表現形、また、その号の集合化著作の集合化表現形を体現する」「集合体現形」としてモデル化されるのである。

「集合体」は「集合体現形」である。しかし、「集合体現形」は「集合体」ではない。目の前のトラは哺乳類である。しかし、哺乳類はトラではない。カテゴリーが異なる両者は訳し分けなければならないのである。

## 補遺2

「レクチャー」はさらに、異例中の異例といえるWEMI「ロック」、つまり「著作」「表現形」「体現形」「個別資料」がすべて1対1対応する事例があることを指摘している(原語を補入した)。

著作がその性質上、単一の表現形でのみ実現し、単一の体現形シングルトンでのみ具現化される唯一(unique)の美術オブジェクト(以下略)。<sup>27</sup>(引用15)

この点については、既に第3章「モデル・規則・行為」の補遺1で言及している。<sup>28</sup>いわゆる一点物(unique)の絵画は文字通り「そのモノひとつ」しかない。例えば、ルーブル美術館にある「モナリザ」と異なる対象(オブジェクト)は、それが何であれ「モナリザ」ではない。「唯一の美術オブジェクト」では、「オブジェクト」それ自体が作品の本質の一部なのである。

「唯一の美術オブジェクト」のWEMI「ロック」は、「個別資料」(この場合は「単一の物的対象」)が他の「実体」を「ロック」しているといえる。逐次刊行物のWEM「ロック」もまた、逐次刊行「体現形」(キャリア)がWとEを「ロック」している。これはコンテンツ重視のLRMにとって、「不都合な真実」に他ならない。LRMは「広範な計画」=「著作」という力業を使って、「ロック」の向きを強引に逆転させたのである。

「モナリザ」の場合、例えば、複製画(精密なコピー)を新たな「表現形」として認めるならば、「ロック」は消える。しかし、現実にはオリジナルと複製画(コピー)は峻別されるので、WEMI「ロック」は解消されずに残る。

## 補遺3

「レクチャー」はマイナーチェンジとみなされるケースについて、次のように述べている。

時間の経過とともに、逐次刊行著作全体の編集方針、スタイル、範囲が変更される場合がある。これらの変更の一部は、些細で重要ではないと考えられる。例えば、当初の計画では複数の言語での記事の受け入れが許可されていたが、その後の編集方針で1つの言語のみに制限される場合があるかもしれない。また、学術雑誌は、時間の経過とともに投稿や査読の方法を変更する場合がある。<sup>29</sup> (引用16)

雑誌はいわゆる「リニューアル」を行うことがあるが、それらを含め、多くのコンテンツに関する「計画」の変更は「些細で重要ではない」変化とみなされる。つまり、そうしたケースはすべて「A」(マイナーチェンジ)であり、同じ逐次刊行「著作」のままとみなされる。

「レクチャー」は「計画」の変更が別の逐次刊行「著作」への変化につながるケースとして、以下のような例を示している。

一方で、一部の変更は、重要な変更と見なされる場合もある：最初の逐次刊行著作が終了し、最初の逐次刊行著作に基づいた別の逐次刊行著作に変換されたと考えるのに十分であると。このような変更には、範囲の大幅な変更、編集方針を担当する組織の変更、2つの既存の逐次刊行著作の統合、また、出版形式の変更などが含まれる。<sup>30</sup> (引用17)

こうした「計画」の変更は基本的に媒体とタイトルの変更を伴っており、「C」=別の逐次刊行「著作」への変化とみなされる。引用22の例の中で、純粹にコンテンツの変更だけで別の逐次刊行「著作」とみなされる可能性があるのは、「範囲の大幅な変更」だけである。

---

<sup>1</sup> Pat Riva (小野塚由希子 訳) 「IFLA 図書館参照モデル (IFLA LRM) レクチャー」 「メタデータ評論」 第 10 号、2025.10、p. 27-28、[最終閲覧日:2026-03-31]

<http://techser.info/wpcontent/uploads/2025/10/475117c0c07dca22ebb6566066c463c7.pdf>

<sup>2</sup> Pat Riva, Patrick Le Bœuf, and Maja Žumer, Consolidation Editorial Group of the IFLA FRBR Review Group (和中幹雄/古川肇、他訳) 『IFLA 図書館参照モデル-書誌情報の概念モデル-』 樹村房、2019.12、p. 18

<sup>3</sup> 同上、p. 96

<sup>4</sup> 前掲1、p. 30

<sup>5</sup> 前掲2、p. 71

<sup>6</sup> 同上、p. 96

<sup>7</sup> 同上、p. 97

<sup>8</sup> 同上、p. 97

<sup>9</sup> 前掲1、p. 31

- <sup>10</sup> 同上、p. 26
- <sup>11</sup> 同上、p. 26
- <sup>12</sup> 千葉孝一「FLA LRM 試論 (3) -モデル・規則・行為」 「メタデータ評論」 第 4 号、2022.10、p. 24  
一部改変、[最終閲覧日:2026-03-31]  
<http://techser.info/wp-content/uploads/2022/10/6fa905699bd6e9024e428a368ce69a72.pdf>
- <sup>13</sup> 「ISSN, the major principles」 「Changing ISSN」 [最終閲覧日:2026-03-31]  
<https://www.issn.org/understanding-the-issn/assignment-rules/issn-the-major-principles/>
- <sup>14</sup> 前掲 1、p. 31
- <sup>15</sup> 同上、p. 30
- <sup>16</sup> 前掲 2、p. 97
- <sup>17</sup> 同上、p. 97
- <sup>18</sup> 前掲 1、p. 31
- <sup>19</sup> 前掲 2、p. 98
- <sup>20</sup> 同上、p. 97
- <sup>21</sup> 千葉『IFLA LRM 試論 (6) -LRM5.7 「集合体のモデル化」』 「メタデータ評論」 第 9 号、2025.4、p. 65  
<http://techser.info/wp-content/uploads/2025/04/8488b6b2b934cd6ae0580697d11d15e2.pdf>  
[最終閲覧日:2026-03-31]
- <sup>22</sup> 同上、p. 61-62
- <sup>23</sup> 国際オリンピック委員会 (日本オリンピック委員会 竹内 浩、和田恵子訳) 「オリンピック憲章」  
「オリンピズムの根本原則」、2024.9、p. 9、[最終閲覧日:2026-03-31]  
<https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2024.pdf>
- <sup>24</sup> 前掲 1、p. 32
- <sup>25</sup> 同上、p. 29
- <sup>26</sup> 前掲 2、p. 94
- <sup>27</sup> 前掲 1、p. 9
- <sup>28</sup> 前掲 12、p. 39
- <sup>29</sup> 前掲 1、p. 28-29
- <sup>30</sup> 同上、p. 29

(ちば こういち)  
2026年4月8日